

「系譜之内拝領屋敷一部」（松下家文書四・八）

四ッ谷鮫ヶ橋谷町拝領屋鋪一部書

一、寛文四甲辰年四月願之通三拾老人え被下置旨、御留守居衆伊沢隼人正殿被申渡、地割衆城半左衛門殿・北見五郎左衛門殿・本郷庄三郎殿より右屋鋪三拾老人え大縄にて一所ニ請取、小割は矢部庄右衛門割渡申候、水帳之写ニ有之、間口裏行は略之

三拾老人左之通

表田舎間八間三尺八寸 青木代助 此家筋当時不詳、当時ハ伊賀知行百姓地ニ成ル

うら行廿六間 当時定小屋伊賀者永井八右衛門、小石川伝通院住居

高式十表 伝通院近所なるべし

八間一尺 新城与兵衛 屋敷替敷不詳

廿六間四尺 当主渡辺利兵衛、同利右衛門、同繁三郎

伊賀無地方高三十表

九間二尺五寸 無地方高三十表 小普請但、水野大膳組

廿六間四尺 平井八兵衛 同権太夫 同小三郎 同八右衛門 熊五郎

四ッ谷北伊賀丁住居

八間四尺 無地方三十表

廿六間 太兵衛 明屋敷伊賀者

高井三郎右衛門 同善次郎 同三郎右衛門

廿三間一尺	八間三尺五寸	廿四間	八間二尺	廿四間三尺八寸	七間	廿二間五尺	六間五尺五寸	廿一間一尺	六間五尺	廿五間四尺	七間四尺
秋野喜兵衛	地方取	矢部庄右衛門	地方取三十表	最上甚右衛門	地方取三十六表	杉内喜右衛門	無地方高三十表	野村善兵衛	地方取	左右田五兵衛	地方取三十表
同市郎右衛門		同八右衛門		同伊左衛門		同喜兵衛		同源左衛門		同三右衛門	當時五十表
同彦次郎		同庄藏	明屋敷伊賀	同長十郎	明屋敷伊賀	同半七郎	御広敷伊賀者	同庄助	式十表御□□小役人	同源四郎	御留守居支配御膳所
御作事下奉行二成屋敷上ケ		同松之助	鮫河橋住居	同	鮫河橋住居	同卯之介	青山五十人丁住居	當時山口嘉門		同中□□	同孝二郎
		鮫河橋住居								鮫河橋住居	牛込御門内住居

三十表 御細工所同心当主矢島棗助 権兵衛

麻布筭橋住居

九間一尺 無地方三十表

明屋敷伊賀

廿二間一尺五寸

吉村武兵衛 同又右衛門 同伝兵衛 同文次郎 同大吉

深川仲丁住居

九間 無地方三十表当時二百三十表

御持筒口帶刀組与力

十七間 鈴木伝兵衛 当時同長右衛門 同左仲

仲殿丁住居

九間二尺 無地方三十表

御広敷伊賀

廿六間四尺

深沢勘兵衛 同清左衛門 同三左衛門 同三右衛門同中鍋五郎

四ッ谷南寺丁住居

八間四尺

無地方 御用達支配 御広敷御用部屋陸尺

廿間二尺五寸

本田与左衛門 同平兵衛 同与十郎 十五表高 鈴木 小林

追放二成屋敷当主忠七 佐左衛門

深川椀倉住居

七間二尺

無地方三十表 当時五十表

廿一間五尺

三浦茂兵衛 同彦八郎 同軍治 同新十郎

鮫河橋住居

七間 式尺五寸 無地方 式十表 式斗六升 式合五勺 当時百表 富士見御宝蔵番幸田善太郎組

廿一間 五尺 松下十郎右衛門 同伊太夫 同善左衛門 同善右衛門

鮫河橋住居

六間 五尺五寸 地方取三十表

廿一間 二尺五寸 遠藤市郎兵衛 同伊兵衛 同伴蔵

四ツ谷菱や横丁住居

六間 三尺 地方取

廿四間 五尺 永持源右衛門 屋

当主 池原六兵衛 同忠兵衛 同源八郎 同左助

伊賀無地方 千田谷住居

六間 五尺五寸 地方取

廿三間 永井八郎兵衛 屋敷替敷不詳 永井水之助預りと有り

小普請組水野大膳組伊賀者

当主三十表 久野八右衛門 同伝八郎 同後藤□

伊賀地方取 市谷谷丁住居

地方取

西田四郎右衛門 同断不詳 武士地ニ成ル御徒目付 御勘定

当主伊賀組頭地方取 永井水之助遠島 当主山田常右衛門 同八蔵同

八間二尺五寸

無地方七十表

小普請組南部大膳組 屋敷替

廿一間

近藤彦左衛門

同彦兵衛

同彦右衛門

同和四郎

鮫河橋住居

七間五寸

地方取

十七間一尺

杉屋七郎左衛門

屋敷替歟不詳

永井水之助預りと有り

当主三十表

御広敷伊賀

伊賀地方取

山中惣右衛門

同権十郎

同善左衛門

同惣右衛門

権三郎

下谷三枚橋住居

七間

地方取三十表久太夫

明屋敷伊賀

廿間一尺

磯崎久右衛門

同久右衛門

同十蔵

同又左衛門

同又右衛門

四ッ谷舟板横丁「」住居

六間三尺五寸

無地方三十表

小普請組勝田安芸守組伊賀者

十七間五尺五寸

大竹平兵衛

同源右衛門

同庄助

同平吉

鮫河橋住居

七間

無地方

廿三間二尺

近藤弥次右衛門

同弥右衛門

弥兵衛と改同弥太郎延享元子六月廿五日追放

当主十五表

御同朋支配御奥陸尺

山口安兵衛 神田留山丁住居

七間

無地方二十表式斗六升二合五勺

御広敷伊賀者

廿一間四尺六寸

中根市郎右衛門 同小兵衛 同団右衛門 同清右衛門 同小兵衛

七間

無地方三十表

廿四間三尺

中根長右衛門 當時同十兵衛 同糸助 同長三郎

相の馬場二住居

十 三十表 小普請組

山岡政五郎

麻布筭橋住居

七間

無地方

廿四間

松下金左衛門 断絶 永井水之助預リ

當時三十表

御広敷伊賀

伊賀無地方柚原木甚助 同弥十郎 同長右衛門 同秀五郎

無地方

四ツ谷左門丁住居

萩野作左衛門 同弥七郎 同三五郎 同順蔵

地方取十六俵

明屋敷番伊賀

廿二間二尺

新見源左衛門 同甚左衛門 同小八郎 同忠蔵 同仲蔵

青山原宿住居

七間四尺

無地方

押田喜太郎 同彦太夫 断絶但追放

右何レも田舎也

訳末記有 当時小平甚太郎 明屋敷伊賀 同源右衛門

鮫河橋住居

右 田舎間

小間

ノて二百十九間

五間一尺三寸

右青木代助屋敷上ニ一ヶ所大竹平兵衛、近藤弥次右衛門屋敷之間ニ一ヶ所、合二屋鋪程空地有之、是ハ惣屋敷水溜場也

最上甚右衛門、矢部庄右衛門屋敷之間ニ一ヶ所戒行寺裏門道、内証借シ此所ニ石橋有り

鈴木伝兵衛、深沢勘兵衛屋敷之間ニ一ヶ所南寺町へ上ル道、三間幅本道此所ニ石橋有り

近藤彦左衛門、杉屋七郎左衛門屋敷之間ニ一ヶ所式間幅新道、栄林寺谷へ入口此所ニ板橋有り

松下十郎右衛門、遠藤市郎兵衛屋敷前往還ニ横ニ水道有、石橋有り、是ハ御持筒組与力町より下同心衆前より流下水

惣屋鋪前後ニ三尺幅之水道有

鈴木伝兵衛屋敷之内ニ稻荷有之、是を藤の下稻荷と言、此稻荷大明神ハ田地之時分より所之鎮守と申伝、其勸請之始を不知、伝兵衛屋敷裏戒行寺境之所有之

但、伝兵衛屋敷裏行之末之所、南寺町へ上ル際ニ有之、忠右衛門代迄其所ニ宮有之、忠右衛門・長右衛門と名を改候已後、屋敷之中程へ宮遷いたし候

深沢勘兵衛屋敷裏行之末、文殊院際南寺町へ上ル際ニ榊形壺ツ有之、是ハ南寺町より之流水を溜メ、夫より流水筋也

青木代助屋敷上水溜場所之角より往還ニ横ニ石橋有り

右水溜場所裏行之末、勝興寺境より近藤彦左衛門屋敷裏行之末、百姓地之際栄林寺境迄細道有り

屋敷願之訳、遠藤市郎兵衛物語ニ被申候ハ、権現様江戸御入国之砌、伊賀者御供仕御当地へ罷下り候、御忠勤格別之者故、御本城近所ニ可被差置旨被仰出、半蔵御門際より麴町辺迄之内、北ハ田安御門近所迄ニ致住宅候、其後半蔵御門外ニ御堀出来ニ付、居屋敷被召上為替地四ツ谷大通り北南ニて被下置候、依之右之場所を北伊賀町・南伊賀町と名付申候、其節御用地場ニて無之者ハ其儘ニて住居申候処、其後右之続御堀出来候ニ付、右残り居候者共、居屋敷被召上為替地本所ニて三百坪ツ、被下、家引料も七両ツ、可被下旨被仰出候、其頃ハ本所人家も少ニて場所悪敷住居も難致、其上伊賀仲間二分ケニ成、万事共ニ不自由ニ付、山之手筋ニて拝領仕度、何レも存候ニ付御留守居衆へ奉願候ハ被仰渡候趣難有仕合奉存候へ共本所へ引越候ては仲ケ間二分ケニ成、急御用等并仲ケ間申合、遠所ニて不自由ニ御座候間、何卒山之手筋ニて拝領仕度旨申上候へハ御聞届被成、願之通可被下候場所見立可申旨被申渡候、依之場所見立ニ式三人ツ、方々見立候へ共、三拾壺人一所ニ拝領可仕場所無之候、大久保之廿五騎与力屋敷後通りを願候処、廿五騎与力拝領地之内之由ニて不相叶、其後所々願候へ共、或は下屋敷或は抱屋敷之由ニて不相叶、兎角三拾壺人一所ニ拝領可仕場所無之、仲ケ間致相談此上ハ知行所赤

坂一ツ木村之内鮫ヶ橋之田地を願可申候、地方無之仲ヶ間ニも一所拝領為致可申内談濟、右之田地を願申候段、申達候へハ御留守居衆御申被成候ハ地方高之内之事ニ候へハ、分限高減シ可申候、小身之者不了簡成願ニ候、能々分別可仕旨被仰候ニ付、右之者共申上候は、高之内減シ候ても不苦候間、御願上被下候様ニ申達候、依之御留守居衆御老中へ委細ニ御取成被仰達候へハ、左様ニ御奉公大切ニ存、殊ニ公儀之御物入も無之幸ニ候間、御聞届被成候旨、御申被成候て、嚴有院様御代寛文四辰四月、願之通鮫ヶ橋田地を居屋敷ニ被下候、右高之内減候段、小身之不便ニ被思召、田地之為替地青山筭橋之内五反田と言所を被下候、扱鮫ヶ橋田地之時分居来り候百姓共、町人ニ成商売いたし住居候、尤他所よりも来過半町人借地いたし候、是等も皆々右百姓之由申達積ニ候、若町人差置候儀仕間敷旨ニて御尋も候ハ、田地之節より居来り候百姓共、外へ参り候てハ耕作可仕田地無之ニ付、其儘ニて致住居商売仕候由申訳可仕覚悟候由、仲ヶ間申合候

右辰年御勤合候御留守居衆本多美作守殿、伊沢隼人正殿、北条右近太夫殿、滝川長門守殿
同地割衆城半左衛門殿、北見五郎左衛門殿、本郷庄三郎殿右地割衆と記有之候へ共、御役名御普請奉行と謂申候

但、其頃ハ地割と申候哉、宝永八年十二月より当役諸大夫ニ被仰付候て、御普請奉行と申候哉、御役人書ニは始より御普請奉行と有之

同御老中阿部豊後守殿、牧野内匠頭殿、酒井雅楽頭殿、松平和泉守殿、稻葉美濃守殿、久世大和守殿
右之内内匠頭殿、美濃守殿、大和守殿は月番加判共御勤、雅楽頭殿ハ執事被仰付、已後加判不被仰付、
豊後守殿、和泉守殿は不詳

矢部庄右衛門は其頃仲ヶ間之内にて之為算者故致小割、一ヶ所之空地・水溜場・田地之時分之儘にて、明屋敷番組頭預り置前々之通、年貢も取立候処、大竹平兵衛、近藤弥次右衛門屋敷間之空地ハ、明屋敷組頭之内、永井水之助了簡にて仲ヶ間伊賀重地源右衛門無屋敷故、源右衛門へ預ヶ置申候、後々ハ源右衛門拝領屋敷之由ニ公儀へ書上来り候、一説ニハ水之助内証にて源右衛門へ売渡し候とも申伝来候、此屋敷享保十年鮫橋類焼之節御僉儀、其訳末ニ記申候

青木代助上隣之空地、是も後々水之助内証にて他之人へ売渡申候由、此一ヶ所ハ後々迄も百姓名主仁兵衛、作兵衛支配にて候

最上甚右衛門、矢部庄右衛門屋敷間戒行寺裏門道通り先規是も戒行寺へ売渡候哉、不詳

鈴木伝兵衛、深沢勘兵衛屋敷間、南寺町へ上ル道通り往還之横道也、町並ニ石橋有り

近藤彦左衛門、杉屋七郎左衛門屋敷間ニ栄林寺谷へ入口本町より往還之横道也、板橋是も町並ニ掛りて有り

松下十郎右衛門、遠藤市郎兵衛屋敷前往還ニ横ニ水道石橋有り、此水道御持筒組屋敷より流、此組之頭始服部仲殿也、与力町南方ニ紀州へ御附家老安藤帯刀殿屋敷有り、後々御旗本屋敷ニ成、服部仲殿組屋敷寛文四年之頃、今之所を拝領有之哉、不詳、仲殿町と言町之名、爾今呼来を見れハ仲殿組屋敷仲殿町之始也歟、帯刀殿ハ大名故右石橋帯刀殿より被掛由、其已後帯刀殿屋敷上り牛込薬王寺前へ屋敷被下、帯刀殿此所ニ不被居、已後は組屋敷と町中と出銀にて修復致来候

惣屋舗前三尺幅水道、爾今流後ニ有之水道ハ今ハ絶て無之

鈴木伝兵衛屋敷内之稻荷所之鎮守之訳申伝にハ候えとも、今ハ知者無之、今ハ四ッ谷天王相殿之稻荷

大明神鮫ヶ橋之鎮守と所之者共尊敬す、牛頭天王ハ四ッ谷之鎮守と言、然共両神四ッ谷并鮫ヶ橋交て鎮守と尊敬ス、但シ稻荷本社にて天王相殿也

深沢勘兵衛屋敷裏行之末、榭形今ハ絶無之

青木代助屋敷之上、水溜場所之角より往還ニ横ニ有之、石橋是ハ鮫ヶ橋谷町中より爾今出銀にて修復致来ル

右水溜場所裏行之末、勝興寺境より近藤彦左衛門屋敷裏行之末、百姓地際栄林寺境迄之細道、今ハ絶無之、此細道之中程、松下十郎右衛門屋敷、後ハ崇福寺之門有之、屋敷地之三尺水道際より土手之上崇福寺際迄之間、三四五間程之藪有之、門前ニ小家有之、然ニ何頃より歟、崇福寺文殊院地内を借り南寺町へ門を建替、右所之門絶候、以後尤細道も絶、後は惣藪ニ成都て古来より之後細道、不残絶無之、皆寺々之地ニ自然と成候処、旧記所持之者も無之、勿論古人も段々絶、其熟知者無之、然処享保十巳年二月十四日類焼之節、御用地ニ上り申筈之処、町人願出、地主も得心ニ哉と御尋有之、願之通其儘被差置、委細享保十年之所ニ記、右之通故其代りニ屋敷後通り、寺々之地へ四十五間幅上ケ地ニ成り、則寺々へ御預ケニ成ル、此節より弥後道絶候也

一、寛文八戊申年二月四日類焼類焼之訳系譜一部ニ記、此節町屋御改衆藤堂主馬殿、奥津内記殿御改被成、御法度之旨被仰聞町人差置申間敷由、御申被成候付御留守居衆迄、願書屋敷拝領以後町人差置候段委細ニ認、指出候へハ願之通相叶、右御改衆之帳面ニ被記町人差置候

町屋御改衆中ハ屋敷改衆之事也

右申年御勤合候御留守居衆、寛文四辰年御勤合候四人之衆、此年御勤也

一、延宝六戊午年二月十日類焼類焼之訊系譜一部ニ記今年ハ町屋御改無之

一、天和二壬戌年十一月廿八日類焼右同断町屋御改衆小野次郎右衛門殿、雨宮権左衛門殿御改被成候付、去ル申二月類焼之節藤堂主馬殿、興津内記殿御改ニ付、御留守居衆へ奉願、右御両人之御帳面ニ被記候段申披、其上ニて願書御留守居衆へ差出候処、翌年癸亥閏五月十五日雨宮権左衛門殿、小幡三郎左衛門殿小野次郎右衛門殿御役替代り也被申渡候は去年相改候

町屋之儀御免被遊候間、前々之通町人差置可申旨、御老中阿部豊後守殿被仰渡候段、右両人之衆被申渡候、此節御広敷勤候伊賀之内新城与兵衛、最上甚左衛門、矢部庄右衛門、吉村五右衛門、鈴木甚兵衛、深沢清左衛門、太田与左衛門、三浦茂兵衛、松下十郎右衛門、遠藤市郎兵衛、近藤彦右衛門、杉屋勘左衛門、新見甚之助右拾三人開キ町屋御免ニて公儀御帳面ニ被記候、此以後秋野市郎右衛門、池原六兵衛両人も右之通御免被遊候

右戌年御勤合候御留守居衆大久保山城守殿、杉浦内蔵助允殿、松平縫殿頭殿、内藤出羽守殿、翌亥年閏五月迄御勤合之衆右四人也

同御老中大久保加賀守殿、阿部豊後守殿、戸田山城守殿翌亥年も同断

右戌亥年御広敷勤合候仲ケ間拾三人後式人其外拾六人之者共、此節町屋御免被遊候哉不詳、右御改衆被申渡之儀伊賀は御留守居支配ニ候へハ支配違也、如何、右町屋御改衆と申ハ屋敷御改衆之事ニ候へハ屋敷懸り故、被申渡候哉

一、元禄二己巳年六月拜領屋敷町人之儀、四ツ谷名主勘兵衛支配ニ罷成度旨、願書出ス

覚

一、鮫橋町つゝ、き伊賀之者屋敷町屋并仲殿町伊賀之者居屋敷町屋之儀、四ツ谷町続ニテ御座候間、町御奉行御支配ニ罷成度奉存候、四年以前寅年伊賀町ニ罷在候、伊賀之者町屋之儀、四ツ谷町つゝ、きニテ御座候ニ付、伝馬町名主勘兵衛支配被仰付候、其節拙者共申上候得共、少延引ニ罷成候故、不被仰付候

今度右之名主勘兵衛支配ニ被仰付被下候様奉願候、以上

元禄二年巳六月

右之通御留守居衆へ願候へ共、此節相叶不申候

右寅年伊賀町名主付ニ成候節、願候訳留書ニ無之

一、同七甲戌年二月八日類焼類焼之訳系譜一部ニ記此節町屋御改は無之

一、同年六月十九日被仰出候御書付写

屋鋪之内町人等ニ借置候儀前々より御制禁ニ候、弥堅ク差置申間敷候、至来春ニ可相改候間、可存其旨候、以上

戌六月

一、同年七月御広敷番之頭迄願書出ス控

乍恐以書付申上候覚

一、拙者共居屋敷之内ニ売人三拾年以前より差置申候処ニ、十三年以前天和二年戌十一月廿八日類火ニ逢、其節屋敷御改小野二郎右衛門殿、雨宮権左衛門殿御改被成候ニ付、右之売人共被差置被下候様ニと御訴訟申上候処ニ、翌年亥閏五月十五日屋敷御改雨宮権左衛門殿、小幡三郎左衛門殿

被仰渡候は去戌十一月廿八日類火ニ逢候、売人之儀此度御赦免被遊候間、前々之通差置候様ニと被仰渡候ニ付、只今迄差置申候

右之段少も紛無御座候、弥差置候様ニ奉願候、以上

元禄七年

戌六月

池	原	六	兵	衛
遠	藤	市	郎	兵
松	下	伊	太	夫
最	上	甚	左	衛
吉	村	又	右	衛
菊	地	小	左	衛
荻	野	作	左	衛
北	田	郷	右	衛

間 宮 孫 太 郎 殿
平 賀 三 五 郎 殿

右之通番之頭名付ニて差出申候、但、六兵衛、伊太夫、甚右衛門、又右衛門、市郎兵衛ハ廿七年以前申年類焼之節、藤堂主馬殿、興津内記殿御改ニも逢候ニ付、前々之文言も番之頭衆へ遣ス

廿七年以前御改之節、作左衛門も同町故改有之屋敷類焼、依之作左衛門共ニ六人也、書落敷

一、同八乙亥年十二月七日被仰出候御書付写

公儀より町屋を被下町役勤候分は、有来通ニ可仕候、此外武士屋敷ニ有之町人之分は差止め可申

旨被仰出候間、右之趣支配方へ堅ク可被申渡候、以上

亥十二月

当年は余日も無之候間、来春三月迄ニ町屋引払候様ニ可被申付候、以上

右之趣被仰出候、御用番ハ御老中戸田山城守殿、若年寄衆井上河内守殿也

一、同月廿五日町屋絵図牧野半三郎殿へ致持参候、半三郎殿屋敷御改衆也

一、同九丙子年正月御留守居北条安房守殿迄へ上ル書付

谷町地主三拾三人、借地五拾九人

最上 甚右衛門 地借り三人 棚十五 人四十四人

吉村 又右衛門 同老一人 棚十七 人五十五人

松下 伊太夫 同老一人 棚十式 人廿六人

遠藤 市郎兵衛 同式一人 棚十九 人六十老人

池原 六兵衛 同老一人 棚廿老 人五十三人

荻野 作左衛門 同四人 棚廿 人五十六人

右ハ御広敷組合町並計也

地主三拾三人と有之、内式人誰々入候哉、不知

一、同月廿五日上ル願書之控

荻野 作左衛門 柚原木 甚助

遠藤市郎兵衛
 松下伊太夫
 吉村又右衛門
 池原六兵衛
 三浦奎右衛門
 大竹平兵衛
 小平孫右衛門
 鈴木忠右衛門
 太田与左衛門
 秋野市郎右衛門
 最上甚右衛門

右拾三人ハ三拾三年以前、四ツ谷鮫ヶ橋伊賀者地方之内にて屋敷拝領仕、伊賀者三拾式人町並にて其砌より売人差置申候処ニ、二十九年以前申二月類火ニ逢申候節、藤堂主馬殿、奥津内記殿町屋御改被成候節も御改帳ニ附売人差置申候、又々十五年以前戌十一月廿八日類火ニ逢、其節小野二郎右衛門殿、雨宮権左衛門殿町屋御改被成候ニ付、右之売人共差置申度段、御訴訟申上候へハ翌年亥五月十五日町屋御改雨宮権左衛門殿、小幡三郎左衛門殿被仰渡候は去ル戌十一月廿八日類火ニ逢候売人之儀、御赦免被遊候間、前々之通差置候様ニと被仰渡候ニ付、開キ町屋にて見セを出シ指置申候、内証名主伝右衛門、平四郎と申者ニ支配いたさせ置候、町御役等も不仕候、前々申上候通、町御奉

行御支配ニ被仰付、四ツ谷名主勘兵衛支配ニ罷成候様ニ奉願候、以上

子正月

一、同二月晦日町屋御赦免被仰出三月二日御広敷方へ被仰渡、御留守居岡部丹波守殿承り也

御広敷伊賀者

荻野	最上	柚原木	平野	服部	小口	森田	加藤	菊地	水本	押田	今田	渡辺	宮崎
作左衛門	甚右衛門	甚助	七郎右衛門	五郎右衛門	伊兵衛	金右衛門	清太夫	小左衛門	権右衛門	庄右衛門	庄太夫	太兵衛	市太夫

喜多田	広木	福山	須賀谷	別紙二	都合廿六人	遠藤	野村	秋野	太田	鈴木	小平	大竹	三浦	松下	池原	吉村	遠藤
郷右衛門	喜左衛門	左衛門	政右衛門			弥右衛門	源左衛門	市郎右衛門	与左衛門	長右衛門	孫右衛門	平兵衛	左衛門	伊太夫	六兵衛	又右衛門	市郎兵衛

(欄外)

「丹波守殿御広敷ニて番之頭平賀三五郎殿被仰渡此方共へ被申渡候」

右之者共年久敷表町屋ニ借来候ニ付、有来之通御免被仰付候、支配無之分は向後支配附ニ罷成、町役可相勤者也

右御老中阿部豊後守殿被仰渡候由、岡部丹波守殿被申渡候

右御礼ニ御留守居六人彦坂老岐守殿、大久保玄蕃頭殿、堀田河内守殿、岡部丹波守殿、北条安房守殿、中根大隅守殿并番之頭衆八人、屋敷改牧野半三郎殿、松野八郎兵衛殿へ不残廻ル

一、同四月九日屋敷売券樽屋市右衛門方へ遣ス控

一、表口京間六間五尺五寸 拝領屋敷

裏行式拾間町並 松下伊太夫地借り

小間老間ニ付直段八両屋敷 十右衛門

右町年寄ハ奈良屋市右衛門、樽屋藤右衛門、北村彦右衛門三人也、樽屋市右衛門とハ不分明、按ニ遠藤市郎兵衛常ニ物語被申候ハ、売券之書付樽屋方へ遣候由、以之思ニ樽屋藤右衛門ニて可有之、市右衛門とハ相違敷、然共久記之事故其儘ニて差置候

(欄外)

「此十右衛門ハ町之年寄役相勤、其子十右衛門跡役相勤、病死以後此役断絶」

一、同月廿日開町屋町人町奉行支配ニ被仰付候間、明廿一日より廿三日迄之内、間口間敷委細ニ書付、

川口撰津守番所へ右町人持参候様ニと被仰渡候、案紙之写

一、何町表口京間何程

間 宮 孫 太 郎

裏行何程

平 賀 三 五 郎組誰

元禄九年子四月

右之通之書付大久保玄蕃頭殿御広敷へ御持参被成、孫太郎殿、三五郎殿へ御渡候、案紙之通ニ認、

廿二日町奉行川口撰津守殿御番所へ地借り之町人持参、何レも致判形候

右数寄屋橋之内撰津守殿御番所へ町人持参、手前屋敷より八十右衛門出ル

一、谷并仲殿町開町屋、間口京間積りニメ合式百三十七間四尺五寸

一、開町屋御免ニて町奉行支配ニ成候ニ、町年寄三人え銀老枚ツ、合三枚、同手代十五人え金百疋ツ、合三両三分出ス、此金銀地主三拾六人ニて出ス

此三拾六人ハ谷并仲殿町・権田原共也

一、名主給一ケ年ニ金老分式朱ツ、出ス、但、五月式朱、十月老分兩度ニ出ス、内式朱ハ御町ニ成候ニ付加増也、地主三拾六人と言ハ谷ニ三拾老入、仲殿町ニ式人、権田原二丸衆三人也、右之儀、子四月廿七日明屋敷組頭永井水之助宅ニて定也

一、此度之祝儀ニ錢貳百文と肴、兩名主伝右衛門・平四郎へ樽代、月番之年寄へ家樽と桐箱入之扇子、其外之年寄四人へも同断、名主手代へ錢百文、五人組へ家樽肴遣ス

但、此役人共此度申付たるニあらず前々より有之

一、表口六間裏幅三間三尺五寸、南側八間北側八間五尺、坪数合四拾坪三合式勺六才、此取米老斗七合

五勺四才

右ハ地借りニ借し候所也、右ハ伊賀町蔵屋敷ニテ惣水帳改候節、書拔取

去亥年老斗七合五勺四才、代五百廿六文、子年同升、代五百四十五文

一、右之時分内証ニテ申付候名主伝右衛門、平四郎、但、年寄十右衛門ハ松下十郎右衛門地ニ罷在候、
残年寄ハ誰地罷在候哉、不詳

町屋御免已後名主老人ニいたし町奉行所へ届候て申付ル、奉行所より被申付候にてハ無之故、役料之儀名主給金と申来候、借地町人ハ時々替り候者也、名主は此方抱候筋之者ニ候間、余町とハ違、万事地主共へ殊更伺跡目等申付候事也、此節より名主与右衛門、治右衛門、栄蔵事治右衛門

(欄外)

「給金此節より式朱ツ、増夏御借米之節式朱冬御切米之節老分都合金老分式朱ツ、遣ス」

一、享保二丁酉年七月明屋敷組頭より案紙来、左之通認出ス

此書面ハ「難少々相違

覚

一、拝領居屋鋪

鮫ヶ橋谷町名主附開町屋

坪数百四拾坪

右屋鋪ニ住宅仕候

右之外所持之屋敷は先達て書出候通、相違無御座候、以上

享保二酉年七月

松下次郎吉印

種村友右衛門殿

中村七兵衛殿

岡室善右衛門殿

右同四日二七兵衛方へ遣候、尤前方外二屋敷無之段書上有之候

一、同十月五日左之通認出ス

覚

一、居屋鋪

鮫ヶ橋谷町名主附開町屋

坪数百四拾坪

右屋敷之内ニ住宅仕罷在候

町並表間口七間 裏行 北之方式拾貳間

南之方式拾壹間

紀伊国屋金兵衛借地

表間口五間 裏行拾四間

三河屋十右衛門借地

同間口貳間 裏行六間

寿光院様附遠山善次郎支配

裏ニて貳間三間

宮沢平四郎借地

右之外所持候屋敷は先達て書出候通、相違無御座候、以上

享保二酉年十月五日

松下次郎吉印

種村友右衛門殿

中村七兵衛殿

岡室善右衛門殿

一、享保三戊戌年八月御留守居衆御申渡ニテ組頭へ証文、左之通認出ス

証文之事

一、拙者拝領屋敷之内鉄砲所持仕候浪人御吟味御座候処ニ、浪人差置不申候、此已後鉄砲所持之浪人差置候ハ、早々御届ケ可申候、為後日証文仍如件

享保三年戌八月

松下伝

吉印

種村友右衛門殿

中村七兵衛殿

岡室善右衛門殿

一、享保六辛丑年二月九日類焼類焼之訳系譜一部ニ記

一、享保七壬寅年、名主治右衛門方より来候由、地借り茂兵衛方より遣候書付之写

一、鮫ヶ橋谷町、惣間数京間貳百九十九間貳尺五寸

此人足 老ヶ年十五返勤之積り、四百五拾人

此賃銀 九百目

老ヶ年二三度

来卯年より上納

町年寄三人

名主治 右衛門

一、享保八癸卯年十一月治右衛門方より来候由、茂兵衛方より遣候書付之写

一、表京間七間貳尺五寸

壹ケ年分 此公役

八百四拾九文

小間壹間ニ付壹兩五分懸り

但シ廿間口壹人役 人足壹人ニ付銀貳兩ツ、也

壹ケ年十五返勤

十一月

名主治 右衛門

松下伝吉様地守

茂 兵 衛殿

来ル五日迄之内可被差出候

右役金出方之儀当町並可有之候間、出方極り候迄茂兵衛方より差出させ置候、其後矢部庄蔵と相談候処、地主より三分一、地借りより三分二為出可申旨相談、遠藤市郎兵衛、三浦「ママ」へも談し置、其外寄々聞合候処、何レも右之通之品ニ出候ニ付、享保十四己酉年正月十七日右之訊茂兵衛へ申達、去申年迄出候分差引濟、但、享保十九寅年十月より此方にて家作致、家守附候故に年中三度出之公役金不残此方より出ス、尤寅十一月出之分より出ス

一、享保十乙巳年二月十四日類焼 類焼之訊系譜一部ニ記

拝借之訳拝借一部二記

一、同三月御普請奉行朽木丹後守殿家来矢部伊右衛門并町役人来り、地主々々へ申達候は類焼之場所近日検地打ニ参り可申候旨、普請之儀延引可致候、尤出来懸り候分ハ取崩ニ不及由申来也

一、右普請之儀延引可致候、出来懸り候分ハ取崩ニ不及由、御留守居衆よりも申来候段、明屋敷組頭三人より申来ル、右廻状三月廿四日ニ来ル

一、同月御普請奉行朽木丹後守殿家来矢部伊右衛門、同鈴木伊勢守殿家来増田伝左衛門、其外町役人来り、検地并絵図いたし傍爾を建帰り候、但、日宗寺前より鮫ヶ橋往還通り道幅共ニ西へ四十間幅、長ハ日宗寺前より千日谷迄改申候、此節此場所計ニ不際四ツ谷牛込・市谷辺右之通ニ改申候

此節菊蔵屋敷前、往還道幅向組屋敷際より西へ四十間幅、右往還菊蔵屋敷、後崇福寺地内へ掛ケ四十間之所ニ傍爾を建申候、此刻名主治右衛門も立合申候、此方より立合は菊蔵崇福寺和尚立合申候、此節名主治右衛門方有之候、鮫ヶ橋谷町中之帳面持参候ニ付、書拔留写左之通

「田舎間」
(朱書)

表京間七間式尺五寸

松 下 菊 蔵

此書面しろし

裏幅五間半

裏行 南式拾壹間五尺

(注・左七合を丸で囲み「五合」
(朱書))

北式拾貳間壹尺五寸

此坪百四拾壹坪七合

右は寛文四辰年拝領

「田舎間」(朱書)

表京間六間五尺五寸

遠藤市郎兵衛

裏幅五間五尺五寸

裏行 南式拾壹間式尺五寸

北式拾壹間五尺

此坪百三拾六坪九合

右は寛文四辰年拝領

(欄外)

(朱書)二月廿八日延享ト改元寛保四子年町奉行支配方より被申付治右衛門方にて谷町之惣絵図出来差出候

処田舎間之筈ニ候間認直し候様被申付直し出し絵図納り候由其節之坪詰朱にて直シ置候」

此節宮地喜右衛門屋敷之儀、屋敷改衆掛りにて僉儀有之、其訳ハ此屋敷元水溜場所ニ候処、段々埋り、永井水之助了簡にて喜右衛門先祖源右衛門へ預ケ置候、其委細は寛文四辰年惣仲ケ間屋敷拝領之留書之所ニ記、扱此屋敷後々は拝領屋敷之由ニ書上来候、然処ニ宮地喜八郎代敷、其親之代敷、仲ケ間無屋敷之者山岡金助へ売渡申候由、勿論致間敷訳之儀故、曾て知者無之候、此節其事相知レ候、但、右体之不埒成事共昔ハ致候者有之、爾今其悪事不知レ者も彼是余程有之、或は屋敷を売渡無屋敷之由書上来候も有之、或は我屋敷売渡代りニ坪数少計成所を買置、夫を拝領屋敷之由書上来候も有之、不宣事故、其人々之姓名ハ相記不申候、扱此節御普請奉行御両人家来其外役人鮫ケ橋屋敷々々之分檢地を打、地主姓名其地借り之町人等ニも相尋、名主治右衛門帳面ニも引合、此喜右衛門屋敷ニ至り相尋候処ニ、地借り之町人ハ山岡金助屋敷之由申達、治右衛門方之帳面ニは宮地喜八

郎屋敷之旨書記有之、不分明ニ付、右役人共金助方へ参り相尋候処、倅金七郎有之儘ニ先規之訳申
達候由、依之屋敷改衆へ右兩人之者共度々被呼寄、再僉儀有之、兩人共ニ倅共を其度々ニ遣申候由、
右御僉儀極、右屋敷改衆へ右兩人呼出し有之、喜八郎代りニ倅喜右衛門、金助代りニ倅金七郎参り
候処、屋敷之儀始終之訳不埒ニ候、然共金助儀有体ニ申上候ニ付、右屋敷半分ツ、兩人ニて抱屋敷
ニ可仕旨、被仰渡候段、被申渡候、金助ハ御広敷伊賀、喜八郎ハ浄円院様附伊賀相勤候

一、右檢地打候事ハ其前々御用地ニ上り候由、下説ニ申候ニ付、地借り之町人共ハ願出候ても不苦儀故、
住馴商売差引も取広有之候間、若御用地ニも上り候事ニ候ハ、塗屋ニ仕り、其儘ニて住居仕度旨、当
月御用番町奉行大岡越前守殿并御普請奉行兩人之衆へ日々願ニ出候処、火除ニ付御用地ニ上り候由ニ
極り候故、弥日々願ニ出候

当三月越前守殿御用番故、越前守殿懸り成候付、同役諏訪美濃守殿へは不出

一、同四月十七日明屋敷組頭より同伊賀矢部庄藏、松下菊藏兩人ニ為持銘々方へ遣候処、何レも承知ニ
候

鮫ヶ橋并伊賀町拝領地ニ罷在候町人共塗屋願ニ町奉行所え罷出候ニ付地主之面々も居宅右同前ニ
仕罷在度哉否大岡越前守殿より御尋之由仙石丹波守殿より申来候間名主治右衛門方より詮議致さ
せ如此相認メ差出し申候為念懸御目ニ申候、以上

四月十七日

種村友右衛門
中村七兵衛
倉地四郎左衛門

竹姫君様御広敷伊賀者	同断	月光院様御広敷伊賀者	同断	同断	同断	同断	瑞青院様御広敷伊賀者	同断	同断	御同所伊賀者	二丸御広敷御用部屋書役	御本丸御広敷伊賀	一位様御広敷伊賀
渡部理兵衛	近藤弥兵衛	平井権太夫	太田平兵衛	小平孫右衛門	中根団右衛門	永井源左衛門	宮崎宇兵衛	温井新八郎	中根十兵衛	大竹庄助	鈴木長右衛門	杉内半七郎	柚原木弥十郎
								下ヶ札拝借地					

同断 最上伊左衛門

御勘定 木原文右衛門

西丸火之番 秋野彦次郎

御鳥見 近藤彦兵衛

館林水方役人 荻野弥七郎

下ヶ札御代官鈴木平十郎支配

伝奏屋敷定番 野村源左衛門

下ヶ札御目付支配

御勘定支配 岡室伝次郎

同断 磯崎久右衛門

普請人足方伊賀者 左右田三右衛門

進上取次上番 池原忠兵衛

小普請酒井隠岐守殿 山中善五郎

小普請松前伊豆守組 吉村伝兵衛

右之面々は明屋敷支配之者にては無御座候得共、地借り之町人共一同之御訴訟ニ罷出候付、地主共承候処、地借り同前之存寄にて塗屋ニ仕、住居仕度旨何も申候、以上

巳四月

種村友右衛門
中村七兵衛

倉地 四郎左衛門

一、同十八日明屋敷仲ケ間久野八右衛門、刑部弥右衛門、飯田長兵衛、徳田甚兵衛、永井平蔵右五人より残之仲ケ間右之趣之体ニ組頭迄願書出し可申哉、廻状ニて申来、承知之旨何レも返事有之、右五人ハ明屋敷役人之内也

一、右之趣内談有之内ニ屋敷被召上候旨、被仰渡有之候へ共願書出ス、此節願書組頭迄出し組頭より右之趣願書認直し、尤支配ニ無之前條之銘々存寄聞合之趣も添、仙石丹波守殿へ出ス

奉願候覚

一、此度拙者共拝領屋敷御用地ニ被召上候段、被為仰付奉畏候、若火除ニも罷成可申候ハ、塗屋蠣から家ニ仕住居仕度奉存候間、只今迄之場所ニ被為差置被下候様奉願上候、此段被仰上可被下候

巳四月

拝領屋敷四ツ谷南伊賀町

明屋敷番伊賀者 粕谷作右衛門

同断 同断 刑部弥右衛門

同断 同断 永井平蔵

同断 同断 町屋 妹尾茂右衛門

同断 同断 後藤七郎右衛門

同断 同断 飯田長兵衛

同断 同断 椎名清左衛門

同断 同断 平山直右衛門

拝借地
宮地
嘉助

右連印にて差出ス

種村友右衛門殿

中村七兵衛殿

倉地四郎左衛門殿

一、同四月十九日町屋敷之分計願之通被仰付候御書付写

四ツ谷伝馬町式丁目

同 伊賀町

牛込肴町南側

同 代官町西側

同 御細工町

同 御納戸町

同 御簞笥町

市谷柳町分

同 町屋敷老ヶ所

同 薬王寺門前

鮫橋谷町

元鮫橋

表町

仲殿町

北町

右町屋願之通家作土蔵作り又は塗垂ニいたし瓦屋根蠣から屋根ニ仕候て、直ニ住居可仕候、且又右町屋之内ニ伊賀者其外諸同心拝領屋敷有之分、是又地借り之町人同様ニ家作可仕候

右之趣可被申渡候御普請奉行え可被談候、以上

四月

右御書付明屋敷伊賀へは御留守居衆被申渡候段、組頭種村友右衛門申渡候

此節御勤合御老中戸田山城守殿、水野和泉守殿、松平左近将監殿、松平伊賀守殿、但、山城守殿ニは御用番御免ニて月番無之、当四月御用番伊賀守殿也

御留守居衆松前伊豆守殿、酒井隠岐守殿、大久保下野守殿、仙石丹波守殿、但、当四月御用番丹波守殿也

町奉行大岡越前守殿、諏訪美濃守殿、但、当四月御用番越前守殿也、御普請奉行朽木丹後守殿、鈴木伊勢守殿、但

一、同五月八日組頭迄出ス証文之控、但、是ハ御留守居衆より証文取置可申旨御申候ニ付、左之通

私共拝領町屋敷鮫ヶ橋谷町当二月十四日類焼仕候ニ付、御用地ニ可被召上旨被仰渡候、然処ニ土蔵作り又は塗垂ニ家作仕、尤屋根之儀は瓦葺或は蠣から屋根ニ仕住宅仕度旨、町御奉行所え地借り之町人共願出候ニ付、奉願候通被仰渡候、私共居宅之儀も御尋ニ付、右地借り之町人共家作之

通、普請仕住居仕度旨申上候処、是又其通家作仕住宅可仕旨、被仰渡難有奉存候、自分は勿論地
借り之町人共迄、向後共土蔵作り又は塗垂ニ家作仕、屋根之儀瓦葺蟻から屋根ニ可仕候、為後日
証文差上候、以上

享保十巳年

五月八日

鮫ヶ橋谷町

高井久三郎
矢部庄蔵
三浦彦十郎
松下菊蔵
遠藤市郎兵衛
久野八右衛門
深沢八十郎
新見甚左衛門

種村友右衛門殿
中村七兵衛殿
倉地四郎左衛門殿

右家作相濟候以後、町奉行方役人両三度見分ニ相廻ル、町人共家作改武士方は町奉行支配ニ無之故、
改之役人地主家作は改不申候、町屋は家々上ケ塗等迄委改候也

一、享保十一丙午年四月四日名主治右衛門方より地借り茂兵衛方迄申越候付、左之通認遣ス

西丸山里伊賀

松下菊藏

右寛文四辰年月日不知、松下十郎右衛門代ニ拝領仕、代々私迄所持仕候、以上

一、享保十二丁未年正月廿六日御留守居酒井隱岐守殿より左之通

一、新規屋敷願申上未御屋敷不被下候分、又何年已前何月誰殿え願被申上置候分

一、右之内勤之品替り候敷、又は隱居病死等之者有之候ハ、其訳書加へ

一、新規屋敷願御屋敷被下相濟候分、又何年已前何月誰殿被仰渡屋敷被下候訳

一、屋敷可被下置段、被仰渡相濟未場所見立不申候分

右之趣早々書付一兩日中可被差出候

正月廿六日

酒井隱岐守

別紙書付遣之候、委細書付差遣候間、一兩日中御差出シ可有之候、此段可相達旨隱岐守被申付候間、

如此二候、以上

正月廿六日

酒井隱岐守内 稻井庄太夫

山里勤御庭ノ戸番衆中

渡辺武右衛門

同 伊賀衆中

藤森尉右衛門

右之通ニ付拾式人之内拾人は拝領屋敷有之、式人は無屋敷ニて屋敷拝領願先達て出置候、右之趣ニ認
同廿九日御留守居部屋迄差出ス

一、同月名主治右衛門方より地借り茂兵衛方迄申越候趣ニ付左之通認遣ス、尤此節は案文来ル

松下菊蔵

私祖父松下十郎右衛門御本丸御広敷伊賀者相勤罷在候節、寛文四甲辰年四月四ツ谷鮫ヶ橋谷町町屋敷拝領仕爾今住宅仕候、其節被仰渡候御留守居衆相知不申候、以上

未正月

一、同閏正月廿八日御留守居酒井隠岐守殿より左之通

各之内当御代町屋敷町並屋敷拝領之方有之候ハ、何年以前何之年被下候、其節御老中誰殿被仰渡候段書付早々可被差出候、当御代拝領無之候ハ、其段も御申聞可被成候、此旨可相達由、隠岐守被申候間、如此御座候、以上

亥正月廿八日

山里勤御庭ノ戸番衆中

同 伊賀衆中

右之趣ニ付拾弍人之内左之通認、御留守居部屋へ差出ス

山里伊賀

小	矢	後	永	山	渡	稻	藤
泉	部	藤	田	里	辺	井	森
藤	庄	七	加	伊	武	左	尉
五		郎	右	賀	右	太	右
郎	蔵	衛	衛		衛	夫	衛
		門	門		門		門

右之者共当御代町屋敷町並屋敷拝領仕候者無御座候、以上

無屋敷故先達而願書差上申候

杉浦助之丞
松下菊蔵
横井藤四郎

閏正月

右残り五人之内村垣吉平、古坂与吉、明楽加太夫、西村庄太夫四人は紀州者にて当御代浜町之内松島町にて町屋敷拝領、倉地文左衛門無屋敷、右之訳認別紙ニ出ス

但、右七人之内矢部庄蔵、松下菊蔵は四ツ谷鮫ヶ橋谷町にて町屋敷名主附、永田加右衛門八本所にて町屋敷名主無之、小泉藤五郎 杉浦助之丞ハ小石川伝通院後にて武士屋敷、後藤七郎右衛門ハ渋谷稲葉丹後守上ヶ屋敷にて武士屋敷

一、寛保三癸亥年十二月十四日名主治右衛門方より家守藤四郎方迄申越候ニ付、左之通認十五日ニ遣ス、伊兵衛方へも同断、地借り十兵衛方迄申越候付書面左之通之様ニ認同日遣ス、間数坪数は違申候

拝領屋敷

松下菊蔵

此の書面なし

表間口京間七間弍尺五寸

裏幅五間半

裏行 南弍拾壹間五尺

北弍拾弍間壹尺五寸

一、寛保三癸亥年鮫ヶ橋谷町橋之修復有之、橋四ヶ所東福院坂下石橋町内出錢、南寺町坂下之末、町際石橋南寺町之寺々と町内出錢、御持筒組屋敷より流町並水道石橋組屋敷と町並出錢榮林寺横町へ入口板橋、伊賀知行地と町並所也、知行地と町内出錢前々より如此二付、此節修復二付八月之月番道奉行根来平左衛門殿え町方より届、九月三ヶ所ハ出錢にて出来濟、御持筒組より出錢之石橋、先年之通出錢之儀町方より与力月番并同心組頭板倉三郎左衛門、岸又左衛門へ度々申達候へ共、彼是難渋申出錢之儀請不申候、依之町内計ニても出錢割合、老人前ニは少々之事ニは候へ共、向後之例ニ成候故、修復取懸り延引、殊之外石橋悪敷成候へ共、取懸不申候処、翌甲子年四月上旬道奉行美濃部市左衛門殿此所へ御通懸り石橋前町人三河屋藤四郎、坂田屋十兵衛、行事麩や半右衛門、且御持組頭板倉三郎左衛門呼寄御尋候処、三郎左衛門先年より出錢不致候由、申達候へハ、兎も角も流水組屋敷より懸り候と見へ申候由被申候、町人共へ往還之事ニ候へハ早々出来可申候、取懸り候ハ、届可申旨被申候、其四五日過市左衛門殿へ組頭板倉三郎左衛門呼寄、流水組屋敷より懸り候へハ、先年之儀は兎も角も出銀被致可然旨御申付、尤与力中へも可被達由被申、三郎左衛門承知之由請罷歸り候、町人共も呼寄右之段被申聞、四月廿日迄ニ出来相濟シ届可申旨御申付候、右之通ニ候故組屋敷も出錢いたし修復出来相濟

右石橋出錢之儀は寛文四辰年屋敷拝領之訳書記候、註書之所ニ委細有之通り安藤帯刀殿より懸り其已後は組屋敷より出錢有之候、書留名主方無之、組屋敷より出錢之儀は慥ニ覚候者も有之候へ共、覚計にて証拠無之故、此節ニ至難渋有之候へ共、前々組屋敷より出錢も有之、道奉行衆被申

様実儀成事故、組屋敷与力同心出銀承知にて相濟候

一、延享卜二月廿九日改元

寛保四甲子年二月、名主治右衛門方より家守藤四郎方へ申越、町中惣絵図認出候由にて間口裏行等書付可遣旨、藤四郎申来候間、享保十乙巳年類焼之節三月検地打候訳書記候、註書之所ニ名主方ニ有之町中之帳面指書之通、間口裏行裏幅迄坪数は不認、尤京間之由ニ認遣ス、遠藤伊兵衛方も同断、地借り十兵衛方渡遣ス

一、延享元甲子年四月屋敷前石橋修復出来濟、委細は寛保三癸亥年四ヶ所之橋修復之所ニ記

一、同九月名主方より家守藤四郎方へ申越、当春町中惣絵図出置候処、当夏町並小普請酒井出雲守殿組近藤弥太郎上り地相渡候節検地改有之、当春惣絵図之内ニ有之間数とハ相違之由、京間にて有之間敷候間、有間数認出候様申来候由、依之絵図改直し候付、認出候様申来候間、当春書出し候通ニ無相違京間を田舎之旨ニ認出ス、遠藤伊兵衛方も同断、十六日ニ出ス

此京間之儀元禄九年丙子四月御町ニ成候節より京間之由書出来、名主方帳面ニも京間ニ認有之

一、延享二乙丑年七月十六日西丸若年寄戸田淡路守殿へ相達候由、西丸御目付中より西丸御広敷御用人中へ申来ル

左近将監殿、本多伊予守殿御渡候御書付

屋敷改ニ有之候帳面之坪数古帳ニ成、相違成も有之候間、為書改置候、依之万石以下若年寄支配之面々居屋敷・下屋敷有之分、所附并坪数等委細ニ書付差出させ取集可被差出候、尤頭支配有之面々ハ頭々支配々より取集差出させ可被出候

右之趣可被達候

七月

右之通ニ付程村紙帳面壹冊ニ仕立、銘々短冊ニ認張紙ニいたし、八月十日西丸御目付水谷半蔵殿へ御本丸御目付中へ被相届候様ニ申達、新十郎殿御渡被成候、御用人榊原七郎右衛門殿、万年三郎次郎殿、大井新十郎殿、御用達神谷清太夫殿、福村理太夫殿、佐山宇右衛門殿、書役大鐘与右衛門、山口与次右衛門、松下善左衛門、但、富田三右衛門ハ無屋敷故、其段書付末ニ張出ス
善左衛門短冊左之通

拜領屋敷四谷鮫河橋谷町開町屋住宅

西丸御広敷御用部屋書役

松下善左衛門

此坪数なし

坪数百五拾坪余

右之外抱屋敷預り地町屋敷所持不仕候

一、同九月上旬名主次右衛門病死、末期より倅栄蔵へ跡役願ニ付、地主中へ地借り之町人を以内意伺有之、家守藤四郎其段申聞、近々町内五人組之者共地主中へ相廻り可申旨之由も申聞候付、公役無滞相勤儀不及言、地面并町中共役儀無懈怠相勤、惣て礼儀正しく可致事ニ候へハ、右倅年若ニも候へハ五人組之内後見同意之趣ニ心得守り立候ハ、跡役申付候ても可然候、惣地主中一同ニ申合可申付事候へハ余人之了簡ハ難計儀候へハ余之地主中ノ了簡承りニ相廻り何レも納得有之様ニ取計候様可申合旨、

町内之者へ可談候、此方よりも地主中此儀ニ付、直談等も可有之事ニハ候へ共、右之趣より外ニは存寄も無之候間、一分之了簡を申聞候間、此已後五人組之者共願ニ来候共、外ニ申遣品無之候段、具ニ藤四郎申達候、然に地主中存寄之趣如何と藤四郎ニ内意尋候処、何レも地主多分ニ可附之由、其内不承知候分、三浦軍治、吉村伝兵衛、杉内半七郎、平井小三郎、松下善左衛門右五人之由申聞候間、左様ニてハ無之、此方ハ先達て申聞候通五人組之内守り立可申と存候者二三人も有之事ニ候ハ、弥申付可然候、又候申聞置候間、其段可申合候、右多分と申衆中之内ニも可然と申方之多分之衆ハ可少是非申かたきニつき多分ニ事寄被置哉、此儀は治右衛門常々地主中之心ニ不叶事多年ニ候へ共、其分ニ被差置処、当時ニ至銘々存寄可有之事と計候、但、此方ハ余儀ニ不相構先達て申聞候通、実儀を以申通候段申聞置候

一、同十月 忌中明已後松屋忠助、大黒屋二郎兵衛、元町代利兵衛三人来り町中之者共相願候栄蔵へ跡役被仰付被下様と申候ニ付、先達て藤四郎へ申聞候通ニて無余儀候間、町中之者共左様存候ハ、此方ハ可申付了簡ニ候、勿論町中之者とハ乍言今日来候三人へ此已後栄蔵ニ附て品ニ寄申談事も可有之候、是ハ其節外之人ヲ差越候へハ又改申聞候趣之挨拶得と有之間敷と存れハ、何年迄も右三人へ可申談候、尤可申談品差当り無之事ニ候へ共、為念申聞候段申達候、此趣藤四郎へも追て申聞置候

一、右地主中納得相済、町年寄方へ願ニ出候由之処、惣地主ニも名主役申付可然と被存候ハ、其趣惣名代ニ名主住宅之地主之印形申請来候様ニと申候由ニて、鈴木長右衛門印形いたし遣候由

一、同十二月町年寄方伺済、名主役申付済候ニ付、地主方へも礼ニ廻ル、廿一日栄蔵事治右衛門并上州屋久右衛門元町代利兵衛三人此方へも来ル、今日当番故不逢候

一、延享三丙寅年四月朔日町年寄より申渡候旨にて名主治右衛門町人共へ申渡候ハ当春下町筋大火、依之余町も随分家作火除ニ成候様いたし可申候、鮫ヶ橋ハ元土蔵作之場所ニ候、然共久敷類焼も無之間、大破之所も可有之候、尤大風大火之節ハ如当春防留いたし候へ共、揚ヶ塗いたし候へハ附火を除、屋根ニハ瓦蠣等繁く揚ヶ候へハ飛び火を除候間、揚ヶ塗瓦蠣等念入仕直し可申候、町奉行所之役人見分ニ相廻り申答ニ候間、左様心得仕直し可申候、来ル四日町中より右請ニ罷出候様ニ可仕旨、町年寄之月番方にて申渡候段、町人共へ治右衛門申渡候段、家守藤四郎申聞候

〔二月廿八日延享ト改元〕
(朱書)

一、寛保四子二月頃町奉行支配町年寄より名主治右衛門方へ申付、鮫ヶ橋谷町惣絵図出来、銘々拝領屋敷間口裏行坪数改有之、此入用金惣屋敷割付候ニ付ス、勿論間口裏行坪数ハ古来拝領之節極り候通、名主方帳面之通認差出候、此京間にて無之、田舎間にて候間、認直候様ニと絵図不納候、京間と認候所田舎間と認直し候ニ付、惣絵図共ニ認直し相納り候

一、宝曆四戌十二月名主治右衛門より左之書付写、家守藤四郎へ遣候ニ付、披見之上書面之趣例覚無之故申遣候様藤四郎へ申聞候

樽屋殿被仰渡

一、父御奉公相勤候内拝領いたし候屋敷を父隠居致候已後、倅拝借被仰付候例有之候哉之事

戌十二月

一、明和九辰五月十五日御留守居高井土佐守殿より申来、二番組番之頭勝市郎右衛門殿、池田忠兵衛殿より廻状被出候

向々頭支配并組中等屋敷届之儀、宝曆六子年被仰出候も御座候処、届無之向々も有之、御帳面
当時名面混雑仕候、依之御支配向頭々并組中拝領屋敷、組屋敷、抱屋敷、抱地町屋敷、町並屋敷、
御預り地等帳面ニ仕立、来ル六月中迄被差出候様被仰渡可被下候、且御留守居・与力・同心屋敷
之儀も右同様被仰渡可被下候

一、大奥女中衆拝領町屋敷抱屋敷等も帳面ニ仕立被差出候様ニ仕度奉存候、以上

五月

屋敷改

寛政三亥年十月廿三日御目付平賀式部少輔殿より左之通之達書、御留守居八月番岡の備中守殿より
申来候旨、頭衆幸田善太郎聞候由ハ、一方より来、左之通

富士見

御宝蔵番

御宝蔵下番同心

右役之内大縄屋敷、大縄知行、大縄御切米之者有之候ハ、随分微細ニ御認メ差出、何役何人は大
縄知行か大縄屋敷か何人は大縄御切米、御切米一紙手形か右之通委細相分候様御認メ、尤差急候間
其心得ニて御調御差出可被成候、依之御達申候、以上

亥十月

平賀式部少輔

御留守居中

此節左之通両通差出候、尤此節古き書物改見候処、只今迄度々書出候屋敷書付とハ間口其外少し相違
ニ候、尤古書付ニ有之候旨、正敷可有之ニ付、両様差出可被成候、古き書物ニ有之候通ニ致度旨、頭

衆善太郎殿申遣候処、右之段御留守居衆へ被申上、古き書付之通ニ以来認め申候様可致旨、善太郎殿被御申聞、只今迄書出候書面不用ニ付被戻候、十一月八日当春ハ□所ニて御留守居ハよろしき高是ヲ可用

覚

拝領町屋敷四ツ谷鮫ヶ橋谷町住宅仕候

表間口 七間貳尺五寸

裏幅 五間半

裏行 南廿壹間五尺

同北 廿壹間壹尺五寸

惣坪数百四十一坪五合

右拝領町屋敷之義は私曾祖父松下十郎右衛門儀、御本丸御広敷伊賀者相勤罷在候節、寛文四辰年四月奉願候通、伊賀者三十壹人え大縄ニて被下置候旨、御留守居伊沢隼人正被申渡候、当時迄引続拝領仕罷在候、以上

亥 十月

松 下 善 左 衛 門

幸 田 善 太 郎 殿

右のり入半切ニて上包美のかミ折かけ 右書面之奥之下ケ札□

古き書物被改正敷可有之

奉□候書面坪数

覚

拝領町屋敷四ツ谷鮫ヶ橋谷町住宅仕候

不宣方 表間口 八間

裏幅 五間五尺七寸

裏行南 廿三間三尺五寸

同 北 廿四間五寸

惣坪数百五十坪余

右拝領町屋敷之義 〽 以下前之通

以来如此

右両通之内間口七間三尺五寸 〽 宣二付 相願候様改置旨、頭衆へ申遣候処、右之旨ニ相成候、

尤頭衆様も被 〽 以上

孫右衛門記之内ニは年久敷儀故可記類不相知

金左衛門記之内

一、最上甚右衛門ハ、金左衛門へ由緒有之、老人扶持ツ、金左衛門方より送り候由、委細金左衛門記之所記、此甚右衛門ハ地方取伊賀者ニて拝領屋敷、金左衛門・十郎右衛門と同町ニて拝領、水帳ニ有之
世一人之内也

一、平井平右衛門ハ、伊太夫親類書ニ養方伯母婿之由書出シ候、十郎右衛門姉歟妹ニ候哉、其筋不知、此平右衛門ハ伊賀者ニて地方ハ無之様承伝候、十郎右衛門存生之時分迄ハ通路いたし候由、其後此筋
目不詳

一、金左衛門姪婿、組同心ニて有之候由、金左衛門記之所記、此婿ハ姓名不知組筋も不知
十郎右衛門記之内ニは、十郎右衛門一生独身故可記類無之

伊太夫記之内

一、伊太夫妻 名長 伊賀者遠藤市郎兵衛娘

延宝六戊午年 誕生 火性

鮫ヶ橋谷町、市郎兵衛拝領屋敷ニて出生、月日時不相知松下十郎右衛門、遠藤市郎兵衛拝領屋敷並地、殊更ニ入魂、十郎右衛門独身故市郎兵衛を親類同意存し、其頃八十郎右衛門歳増故、市郎兵衛も親ミ敬す、屋敷之裏境ニ内証道有之、如此之訳故、十郎右衛門、市郎兵衛子共を愛憐深し、常ニ来て

如実子慕事、如実親元禄二己巳年、伊左衛門伊太夫事養子ニ願濟、引越す、同年婚姻す
二才」

「当巳十
(朱書)